

海 輪 の 火

松方幸次郎とその時代

波濤編

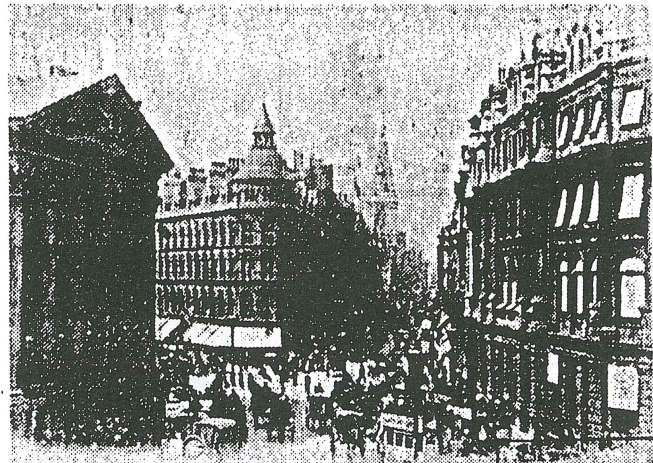
(31)

「いま来るテムズ川はほど近い。しばらく歩くと、車にマーケントレイルディングと明記された共同の事務所ビルが目に入った。全部で二十四社が入るこのビルの中は皆指す会社の名前があった。」

「SUNNY & CO」 盟友金子直吉の率いる鈴木商店ロンドン支店である。この時鈴木商店は、金子の積極経営の下、海外十三都市に支店を構えていたが、ロンドン



高畑 誠一



当時のシティの中心部。この街が世界経済を左右した

高畑は、神戸高商（現神戸大）を卒業しており、幸次郎の名前は以前から耳にはしていた。しかし、面を向かって話をするのは初めてだった。幸次郎はソファに深々と座ると、金子がこの年、幸次郎の意見を聞いて横濱造船所（現石川島播磨）を買収し造船業に進出したことを話題に上らせた。

「金子さんは強気じゃね。おれも同様に強気で船をつくる。そこで一度ヨーロッパの様子を見たいと思って来たんじやが、どうや」

（敬称略）

次郎にして頼みの綱はこの鈴木商店である。さういふ事務所に入ると

シティで高畑と対面

題字は 故松本重治氏

と訂あらずロンドンのホテルに旅装を解いた松方幸次郎は、シティへ星を向けた。シティは、世界の金融、保険、海運の大本山である。各の間に二階建てバスや美しく圍の銀行も企業が、このほほ装った馬車が駆け、書類を小一々（約一・六巴）四方の区（腕（わき）に抱えたトランプス城にオフィスを出し、商品やマンたちが慌たたく道を通り、情報を取計した。第一次大戦、切つていた。在境にニューヨーク・ウォール。幸次郎は、戦時でありながらル街の存在が激しくクロスアップされるが、幸次郎が訪れたこの時期はまだ、シティが世界の経済を牛耳り、政治情の勢をも動かすパワーを持っていた。

ロンドンには世界で最も早く地下鉄の走った都市でもあり、日本がまだ幕末の動乱期にあったころに開通したロンドン地下鉄は、この年一九

「いま来るテムズ川はほど近い。しばらく歩くと、車にマーケントレイルディングと明記された共同の事務所ビルが目に入った。全部で二十四社が入るこのビルの中は皆指す会社の名前があった。」

「金子さんは強気じゃね。おれも同様に強気で船をつくる。そこで一度ヨーロッパの様子を見たいと思って来たんじやが、どうや」

神戸新聞 平成元年（一九八九年）十月三十一日 より転載

辰巳会の為に常々御賛助頂いております

神戸大学教授経済学博士 桂 芳男氏が昨年十月二十六日、

日本経営教育学会（於広島）の創立十周年記念講演会に於いて、

「企業の盛衰に学ぶ」―鈴木商店と金子直吉―と題して講演され

れました要点であります。

レジュメ

企業の盛衰に学ぶ

―鈴木商店と金子直吉―

神戸大学

桂 芳男

きな役割をはたしながらも挫折した鈴木商店の興亡と、その命運を左右した大番頭・金子直吉の人間像を解明する。本講演の項目は左記の通りである。

(I) 鈴木商店論

- (1) 鈴木が残した事業と人材、(2) 大正財閥の花形、(3) 総合商社のルーツ、(4) 米騒動と鈴木焼き打ち、(5) 個人商店から世界的大商社へ、(6) 日米船鉄交換契約、(7) 鈴木店の崩壊。

(II) 金子直吉論

- (1) 経営理念―国益志向型、(2) 利潤観、(3) 競争観、(4) 経営戦略―超多角化志向型、(5) 旺盛無比な事業欲、(6) 無欲恬淡、(7) 人材の育成と指導法、(8) 唐傘商法とワンスリー商法、(9) 非凡な頭脳、(10) 借金経営、(11) 品行方正、(12) 政商―非商党・非鳶商人型、(13) 儒教商人、(14) サムライ根性、(15) 革新的企業家、むすび。

参考までに、鈴木商店の興亡、約半世紀（明治七年頃～昭和二年）についての、時期区分を記しておく。

第一期、個人企業時代（明治七年頃～三十五年）―明治十九年、神戸有力八大貿易商にランクされる。

第二期、合名会社時代、つまり「合名鈴木」時代―資本金は、

明治七年頃、神戸の個人商店からスタートし、きわめて短期間に世界的な大商社に急成長し、大正財閥の花形に化成した鈴木商店は、大正七年の米騒動で本店を焼き打ちされ、昭和二年の金融恐慌で倒産した。工業化の強大なオルガナイザーとして、三国間貿易や超多角的な事業展開によって、日本の近代化に大

改組当初で五〇万円であったが、大正九年に一〇〇倍増資を行い、五〇〇〇万円となる。大正六年には貿易年商十五億四〇〇万円（うち、三国間貿易三億四〇〇万円）に達し、三井物産の年商十億九五〇〇万円を凌ぎ、日本一の商社となる。同年、金子直吉は、三井・三菱と大正財界の覇権を争う「天下三分の宣言書」を発する。

第三期、「貿易部門」分離にともなう、「株式鈴木」（資本金八〇〇〇万円、うち払込み五〇〇〇万円）と、「鈴木合名」（資本金五〇〇〇万円）の、いわゆる二重組織時代―鈴木系企業集団（当該会期の総数、株式会社七十八社、直営事業所六社）、鈴木合名を頂点とする持株支配の四重構造（分身会社↓「過半数支配」会社↓「少数支配」会社↓「関係密接非支配」会社）を形成。大正十五年、財界不況時の貿易年商でも五億二〇〇〇万円（うち三国間貿易三億二〇〇〇万円）を達成。

これを従業員数からみれば、(1)明治二十七〜三十一年頃で、十九〜二十三人程度。(2)明治末年頃で、八〇人を突破。(3)最盛時には、鈴木系企業集団六十五社（資本金五億六〇〇〇万円）で二万五〇〇〇人と称せられた。

土佐の歴史と文化を訪ねて ④

金子直吉

— 広谷喜十郎 —

直吉が育てた企業や人物

わが国の工業化に不滅の光

金子直吉は、吾川郡吾川村出身。高知市ででっち奉公をした後、明治十九年に神戸に行き鈴木商店に雇われたが、明治二十七年に主人が無くなり未亡人よねの厚い信頼を受けて鈴木商店の経営にあたり、めざましい活躍を始めるのであった。

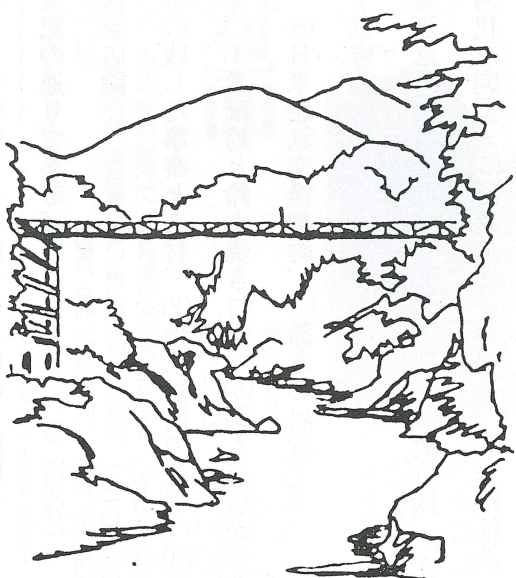
その後、工業部門へも多角的な進出を行い、第一次世界大戦の国際市場において大々的な商業取引を行った。

最近、桂芳郎著『総合商社の源流鈴木商店』、沢野恵之著『史上最大の仕事師』という本が刊行されているが、一時的には、

本講演に関するより詳細については、左記の拙著を参照されたい。

・桂芳男『幻の総合商社 鈴木商店―創造的経営者の栄久と挫折』（社会思想社、平成元年）。

・桂芳男『関西系総合商社の原像Ⅱ鈴木・日商岩井・伊藤忠商事・丸紅の経営史』（啓文社、昭和六十二年）。



三菱や三井に追いつかんばかりの勢いを示す状態であったという。桂氏の研究によると、大正財閥の花形として登場した鈴木系企業集団の最盛期は六十五社、大正六年に貿易年商十五億四千万円となり、三井物産を抜いてトップの座を占めるまでになる。それもつかの間、大戦後の経済不況を乗り越えることができず、やがて鈴木商店は倒産に追い込まれている。

だが、直吉が育てた企業と人物は、その後のわが国の工業化の発展に大きな役割を果たしている。例えば「企業」では、日商岩井、帝人、神戸製鋼所、石川島播磨重工業、三井東圧化学、昭和石油、三菱レーヨン、日産化学、大日本製糖、サッポロビールなど、「人物」は北村徳太郎（大蔵大臣）、大屋晋三（商工大臣）、久村清太（帝人会長）ら、あまりにも多くて全部挙げる事ができない。桂氏は「わが国の工業化に不滅の光を放っている」と述べているほどである。それに、日本発条の坂本寿氏ら多くの土佐人も育てている。

元国際汽船取締役の住田正一氏は「金子さんは英語を全然知らなかった人である。けれども砂糖であれ、麦であれ、銀塊で